

宮崎県感染症週報

宮崎県感染症情報センター
宮崎県健康増進課
宮崎県衛生環境研究所

■ 宮崎県第 49 週の発生動向

定点医療機関からの報告総数は 1,270 人（定点あたり 39.5）で、前週比 116%と増加した。

先週に比べ多かった主な疾患は A群溶血性レンサ球菌咽頭炎と感染性胃腸炎で、減少した主な疾患はインフルエンザであった。

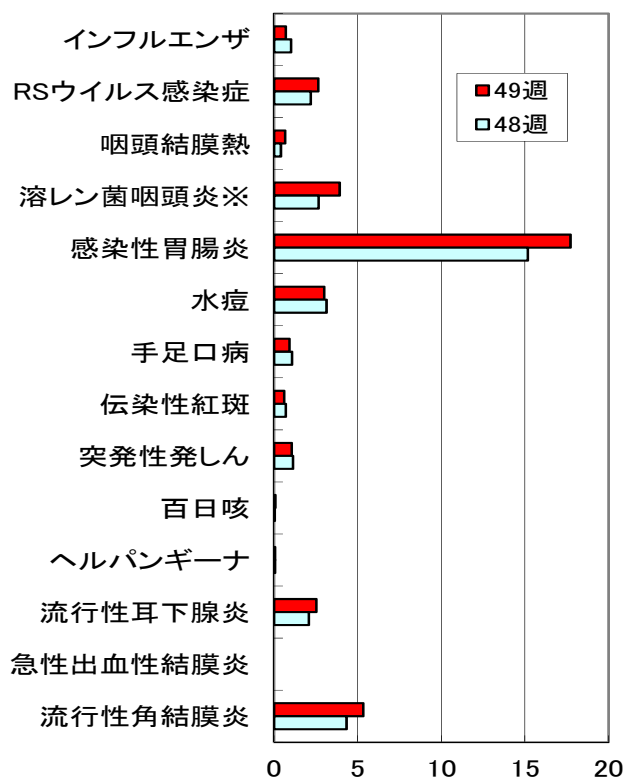
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の報告数は 141 人（3.9）で前週比 147%と増加した。例年同時期の定点あたり平均値（2.3）の約 1.7 倍である。延岡（14.8）保健所からの報告が多く、警報レベルを超えている。年齢別では 4 歳から 7 歳で全体の約半数を占めた。

感染性胃腸炎の報告数は 638 人（17.7）で前週比 117%と増加した。例年同時期の定点あたり平均値（17.4）とほぼ同数である。中央（23.0）、都城（22.8）、日南（22.3）、小林（21.7）、高鍋（20.8）保健所からの報告が多く警報レベルを超えている。年齢別では 1 歳から 4 歳で全体の約 6 割を占めた。

細菌性髄膜炎 1 人が宮崎市保健所から報告された。患者は 11 歳の男児。

マイコプラズマ肺炎 1 人が延岡保健所から報告された。30 歳代の男性で *Mycoplasma pneumoniae*。

《前週との比較》



《定点あたり報告数》
※A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

■ 保健所別流行警報開始基準値超過疾患

	流行警報 開始基準値	定点あたり報告数		年 齢 分 布
		宮崎県全体	基準値を超えた保健所	
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	8	3.9	延岡(14.8)	4歳～7歳で全体の約半数を占めた。
感染性胃腸炎	20	17.7	中央(23.0)、都城(22.8)、日南(22.3)、小林(21.7)、高鍋(20.8)	1歳～4歳で全体の約6割を占めた。
伝染性紅斑	2	0.61	中央(5.0)	3歳～4歳で全体の約半数を占めた。
流行性耳下腺炎	6	2.5	日南(10.3)	2歳～6歳で全体の約8割を占めた。
流行性角結膜炎	8	5.3	宮崎市(8.3)	4歳以下で全体の約4割、30歳代で全体の約3割を占めた。

■ 全数把握対象疾患

- 1 類感染症 : 報告なし。
- 2 類感染症 : 結核 3 例が延岡 (2 例)、日南 (1 例) 保健所から報告された。
 《延岡保健所》・50 歳代の男性で肺結核。咳、痰がみられた。
 ・70 歳代の男性で肺結核。咳、痰、発熱、呼吸困難がみられた。
 《日南保健所》・20 歳代の女性で無症状病原体保有者。
- 3 類感染症 : 報告なし。
- 4 類感染症 : つつが虫病 7 例が宮崎市・都城・小林 (各 2 例)、日南 (各 1 例) 保健所から報告された。
 《宮崎市保健所》・80 歳代の女性で発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹がみられた。
 ・50 歳代の女性で発熱、刺し口、発疹がみられた。
 《都城保健所》・60 歳代の女性で頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹がみられた。
 ・60 歳代の男性で頭痛、発熱、発疹がみられた。
 《日南保健所》・70 歳代の男性で頭痛、発熱、刺し口、発疹がみられた。
 《小林保健所》・70 歳代の女性で発熱、刺し口、発疹がみられた。
 ・70 歳代の女性で頭痛、発熱、刺し口、発疹がみられた。
- 5 類感染症 : ウイルス性肝炎 1 例が日向保健所から報告された。10 歳代の男性で B 型。全身倦怠感、発熱、肝機能異常、黄疸がみられた。

■ 病原体情報 (衛生環境研究所 微生物部)

ウイルス (平成 22 年 12 月 6 日～平成 22 年 12 月 12 日までに検体採取分)

同定ウイルス名	年齢	性	採取日	臨床診断名	材料	同定日
インフルエンザ [*] AH1pdm型	25	男	12.10	インフルエンザ、39℃、咳、鼻閉、咽頭痛、関節痛	咽頭ぬぐい液	12.14
インフルエンザB型	8	女	12.6	インフルエンザ [*] 、39.5℃、咳、痰、鼻水、頭痛、関節痛	鼻腔ぬぐい液	12.14
インフルエンザ [*] AH1pdm型	45	男	12.11	インフルエンザ、38.4℃、咳、痰、鼻水、頭痛、筋肉痛、関節痛、嘔吐	咽頭ぬぐい液	12.14
インフルエンザ [*] AH1pdm型	41	女	12.11	インフルエンザ、39.0℃、咳、痰、鼻水、咽頭痛、関節痛、嘔吐	咽頭ぬぐい液	12.14
インフルエンザ [*] AH1pdm型	24	女	12.12	インフルエンザ、39.1℃、咳、痰、鼻水、咽頭痛、頭痛、筋肉痛、関節痛、嘔吐	咽頭ぬぐい液	12.14

○都城保健所、日南保健所管内でインフルエンザA型、B型の報告があった。都城の6例、日南の1例について遺伝子検査を実施した結果、都城の4例からインフルエンザAH1pdm型(新型)、1例からインフルエンザB型が検出された。都城の1例、日南の1例からはインフルエンザは検出されなかった。

■ 全国第 48 週の発生動向

定点医療機関あたりの患者報告総数は 26.2 で、前週比 122%と増加した。今週増加した主な疾患はインフルエンザと伝染性紅斑で、減少した主な疾患はヘルパンギーナであった。

インフルエンザの報告数は 3,333 人 (0.7) で、前週比 159%と増加した。北海道 (3.8)、佐賀県 (2.4)、長崎県 (2.0) からの報告が多く、年齢別では 5 歳以下が全体の 33%、6 歳から 9 歳が 27%、10 歳から 14 歳が 15%、15 歳から 19 歳が 3%、20 歳代から 50 歳代が 18%、60 歳以上が 4%を占めた。

伝染性紅斑の報告数は 1,545 人 (0.51) で、前週比 138%と増加した。例年同時期の約 3.2 倍である。福岡県 (2.0)、宮城県・長崎県 (各 1.2) からの報告が多く、年齢別では 4 歳から 6 歳で全体の約半数を占めた。

□ 全数把握対象疾患

- 1 類感染症 : 報告なし。
- 2 類感染症 : 結核 318 例
- 3 類感染症 : 細菌性赤痢 3 例、腸管出血性大腸菌感染症 31 例、パラチフス 1 例
- 4 類感染症 : A型肝炎 3 例、オウム病 1 例、つつが虫病 42 例、デング熱 3 例、日本紅斑熱 1 例、マラリア 2 例、レジオネラ症 4 例、レプトスピラ症 1 例
- 5 類感染症 : アメーバ赤痢 10 例、ウイルス性肝炎 1 例、急性脳炎 1 例、クロイツフェルト・ヤコブ病 2 例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 2 例、後天性免疫不全症候群 14 例、ジアルジア症 1 例、梅毒 6 例、破傷風 3 例、バンコマイシン耐性腸球菌感染症 2 例、風疹 2 例、麻しん 2 例

宮崎県 感染症情報

(72定点医療機関)

2010年 第49週(12月06日～12月12日)

疾病名		第48週	第49週	宮崎市	都城	延岡	日南	小林	高鍋	高千穂	日向	中央
インフルエンザ	報告数	60	41	1	12	2	1		2		23	
	定点あたり	1.02	0.69	0.06	1.20	0.29	0.20	0.00	0.33	0.00	3.83	0.00
RSウイルス 感染症	報告数	79	95	16	24	29	2	1	13		10	
	定点あたり	2.19	2.64	1.60	4.00	7.25	0.67	0.33	3.25	0.00	2.50	0.00
咽頭結膜熱	報告数	15	24	2	3	3	8	4	2		1	1
	定点あたり	0.42	0.67	0.20	0.50	0.75	2.67	1.33	0.50	0.00	0.25	1.00
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	報告数	96	141	32	2	59	11	3	19	1	14	
	定点あたり	2.67	3.92	3.20	0.33	14.75	3.67	1.00	4.75	1.00	3.50	0.00
感染性胃腸炎	報告数	546	638	150	137	50	67	65	83	13	50	23
	定点あたり	15.17	17.72	15.00	22.83	12.50	22.33	21.67	20.75	13.00	12.50	23.00
水痘	報告数	113	108	42	25	1	10	4	13		10	3
	定点あたり	3.14	3.00	4.20	4.17	0.25	3.33	1.33	3.25	0.00	2.50	3.00
手足口病	報告数	39	33	13	17		2	1				
	定点あたり	1.08	0.92	1.30	2.83	0.00	0.67	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00
伝染性紅斑	報告数	25	22	7	8			1		1		5
	定点あたり	0.69	0.61	0.70	1.33	0.00	0.00	0.33	0.00	1.00	0.00	5.00
突発性発しん	報告数	41	38	15	9	2	6	1			4	1
	定点あたり	1.14	1.06	1.50	1.50	0.50	2.00	0.33	0.00	0.00	1.00	1.00
百日咳	報告数	1	3			3						
	定点あたり	0.03	0.08	0.00	0.00	0.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
ヘルパンギーナ	報告数	2	2	1	1							
	定点あたり	0.06	0.06	0.10	0.17	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
流行性耳下腺炎	報告数	75	91	14	11	23	31	3	2		5	2
	定点あたり	2.08	2.53	1.40	1.83	5.75	10.33	1.00	0.50	0.00	1.25	2.00
急性出血性結膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00						
流行性角結膜炎	報告数	26	32	25	1	6						
	定点あたり	4.33	5.33	8.33	0.50	6.00						
細菌性髄膜炎	報告数		1	1								
	定点あたり	0.00	0.14	1.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
無菌性髄膜炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
マイコプラズマ肺炎	報告数		1			1						
	定点あたり	0.00	0.14	0.00	0.00	1.00	0.00	0.00	0.00		0.00	
クラミジア肺炎	報告数											
	定点あたり	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00		0.00	

インフルエンザ定点:59、小児科定点:36(インフルエンザ定点を兼ねる)、眼科定点:6、基幹定点:7

上段:報告数
下段:定点当り報告数

●全数把握対象疾患累積報告数(2010年第1週～第49週)

2類感染症	結核	209例(3)			
3類感染症	細菌性赤痢	1例	腸管出血性大腸菌感染症	51例	
4類感染症	E型肝炎	1例	A型肝炎	3例	つつが虫病 14例(7)
	デング熱	1例	日本紅斑熱	6例	マラリア 2例
	レジオネラ症	2例	レプトスピラ症	3例	
5類感染症	アメーバ赤痢	5例	ウイルス性肝炎	9例(1)	急性脳炎 7例
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1例	後天性免疫不全症候群	3例	梅毒 5例
	破傷風	5例	麻しん	1例	

()内は今週届出分、再掲

厚生労働省で実施している感染症流行予測調査の一環として、宮崎県健康づくり協会、県立宮崎病院の協力を得て、2010/2011 年のインフルエンザ流行シーズン前における県内の抗体保有状況を調査した。

調査では、9 年齢群・274 名 (0~4 歳 : 53 名、5~9 歳 : 23 名、10~14 歳 : 25 名、15~19 歳 : 26 名、20~29 歳 : 45 名、30~39 歳 : 25 名、40~49 歳 : 26 名、50~59 歳 : 25 名、60 歳以上 : 26 名) から同意を得て、2010 年 7 月 26 日から 9 月 28 日に収集した血清を対象とした。また、下記の 4 抗原 (1, 2, 3 は今シーズンのワクチン株) を用い、血球凝集抑制抗体 (HI 抗体) の測定を行なった。

1. A パンデミック型 : A/California (カリフォルニア) /7/2009pdm (H1N1)
2. A 香港型 : A/Victoria (ビクトリア) /210/2009 (H3N2)
3. B 型 : B/Brisbane (ブリスベン) /60/2008 (ビクトリア系統)
4. B 型 : B/Florida (フロリダ) /4/2006 (山形系統)

今シーズンのワクチン株はビクトリア系統であるが、山形系統の代表として本株も調査対象となった。

[調査結果]

有効な防御免疫を持つと考えられる 40 倍 (1:40) 以上の抗体保有状況は以下のとおりであった。

また、80 倍 (1:80) 以上および抗原性の変化した株に対する防御に必要とされる 160 倍 (1:160) 以上の抗体保有状況も併せて、図に示した。

1. A パンデミック型 : A/California/7/2009pdm (H1N1) に対する抗体保有状況

10~14 歳群の保有率が 72% と高かった。5~9 歳群、15~19 歳群でそれぞれ 52.2%、46.2% と比較的高い保有率であった。その他の年齢群では 30% 以下となっており、60 歳以上では 7.7% と低い保有率であった。

2. A 香港型 : A/Victoria/210/2009 (H3N2) に対する抗体保有状況

10~14 歳群、15~19 歳群でそれぞれ 32%、38.5% と中程度の保有率であった。その他の年齢群では 30% 未満となっており、30~39 歳群、40~49 歳群ではそれぞれ 12%、11.5% と比較的低い保有率であった。特に 0~4 歳群では 5.7% と低くなっていた。

3. B 型 : B/Brisbane/60/2008 (ビクトリア系統) に対する抗体保有状況

30~39 歳群で 64% と高い保有率であった。15~19 歳群、40~49 歳群でそれぞれ 42.3%、57.7% と比較的高かった。しかし他の年齢群では 30% 未満であり、0~4 歳群、5~9 歳群ではそれぞれ 5.6%、4.3% と低い保有率であった。

4. B 型 : B/Florida/4/2006 (山形系統) に対する抗体保有率

15~19 歳群で 34.6% と中程度の保有率であった。その他の年齢群では 25% 未満と低く、特に 0~9 歳群、60 歳以上では 5% 未満ときわめて低い保有率であった。

[コメント]

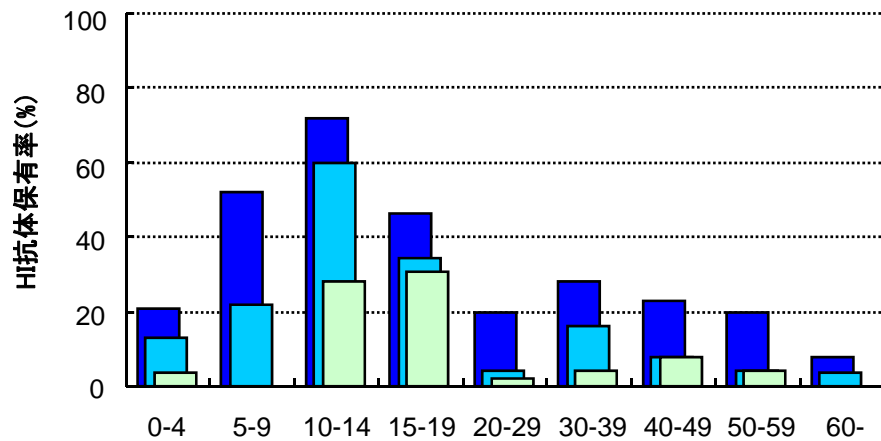
2009/10 シーズンは A/H1pdm ウイルスが流行株の 98% を占めた。それと平行して季節性 A/H1N1 ウイルスの分離例が世界中で激減した。A/H3N2 亜型ウイルスの分離数も激減したが、少数ながら分離された。

A パンデミック型インフルエンザ発症者の年齢分布は 5~14 歳に多く、中高年では少なかった。ただし、中高年齢層での発症および死亡数は少ないものの、いったん発症した場合の致死率は小児をはるかに上回った。入院患者では、基礎疾患がないものでも重症化することが小児で多く見られた。また、インフルエンザ脳症患者の年齢層は、従来幼児での発生が多かったが、今回は小学校低学年層にそのピークが移っている。

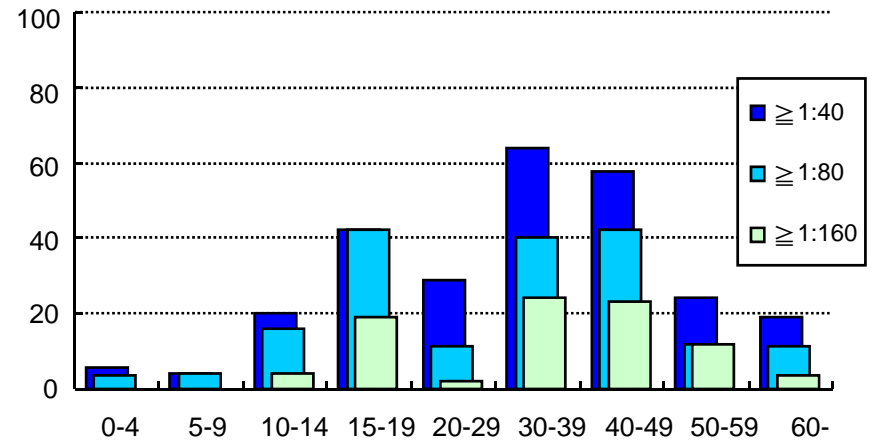
今後、ウイルスの抗原性が変化することもあるため、流行状況については予断を許さない。また、抗体保有状況から成人の感受性者が多く残っていると考えられ、再流行が成人中心に起こると、重症者や死亡者が増えると考えられる。

死亡者や重傷者の発生をできる限り減らすためにも、インフルエンザシーズン前のワクチン接種が重要である。

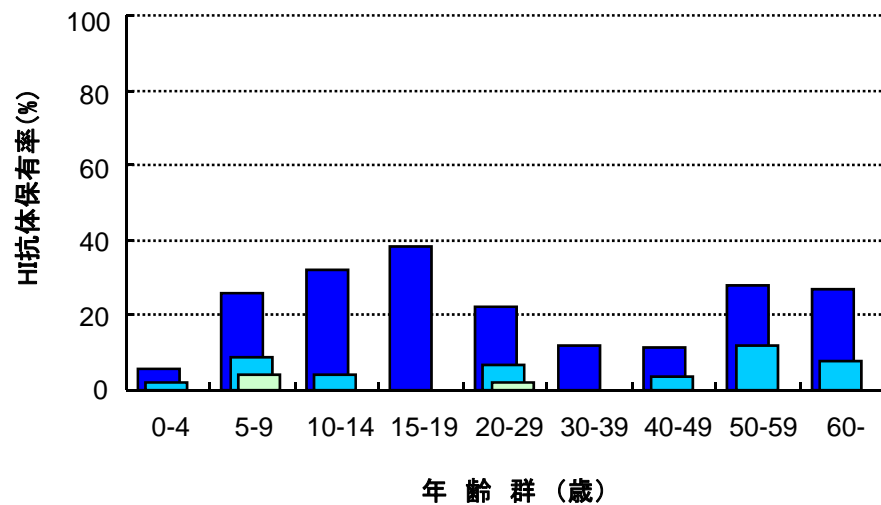
A/カリフォルニア/7/2009 (H1N1) pdm



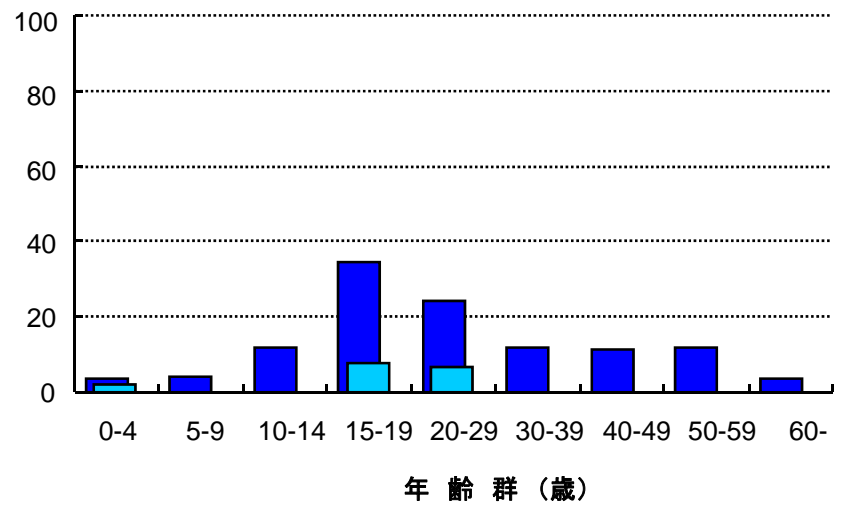
B/ブリスベン/60/2008 (ビクトリア系統)



A/ビクトリア/210/2009 (H3N2)



B/フロリダ/4/2006 (山形系統)



宮崎県における年齢別HI抗体保有状況(2010/2011シーズン前)